

2. 採集資料の観察

1. 調査と記録の方法

今回の資料調査の目的は、下郷伝平コレクションの内容を詳細に把握することと、これらの個々の資料がどのような背景のなかで形成されたものであるのか、またコレクションの歴史的意義を今日に至るまでの利用履歴を検討しながら考察を加えるというものである。

しかし、土器や石器をはじめとした各種の数千点とも言われるこれらのコレクションの全てを観察することは限られた時間のなかでは困難であるため、まずコレクションの中で量的な中核を占める茨城県稲敷市椎塚貝塚と福田貝塚の出土資料を対象とし、さらにそのなかでも今回は土器と土製品、石器に限定した。その結果、今回検討の対象とした資料は331点である。これらはコレクション中の土器の約2割に相当し、今回の調査で椎塚貝塚と福田貝塚の土器の様相はある程度把握できた。

大阪歴史博物館には、大阪市立博物館の時代に資料の受け入れが行われ、その際に作成されたリストが存在する。このリストは遺物個々のリストではなく、受け入れ時のまとまりを意味する番号が掲載されており、小形の物には枝番号が付され、破片などは複数が一括されている。

また、搬入以前の段階か、以後の破損によるものかは不明であるが、石膏やセメントで補修された土器が破損して破片化したものが多数存在する。これらは現在接合作業の途上であり、今回の報告からは除外してある。中には杉山寿栄男の『日本原始工芸』に掲載された図や写真と酷似した個体も含まれている。これらの遺物については近い将来にその内容を公開したい。

検討対象資料は、現在リストの番号にしたがって大阪歴史博物館の収蔵室に保管されている。今回の調査はこの遺物台帳を基本情報として利用し、個々の資料番号の内容（点数・土器型式・遺存

状況など）を観察しながら、写真撮影をおこなった。さらに利用履歴を調べるために、下郷共済会『鍾秀館蔵日本石器時代土器選集』〔下郷共済会1926〕と杉山寿栄男の『日本原始工芸』〔杉山1928〕に掲載の椎塚貝塚、福田貝塚資料の写真、図との照合を行った。

その結果、47点の掲載資料中で31点が照合できた。これ以外にも復元個体が破損して破片になった中に掲載資料ら



写真1 採集遺跡と日付の墨書された土器 (A 43-1)



写真2 福田貝塚と椎塚貝塚の墨書の筆致

しい個体を確認しており、将来的にはその数の増加が見込まれるであろう。

2. コレクションの特徴

今回観察した資料は、土器破片を除いて観察できた遺物の大半に墨書きによる遺跡名が記載されていた。さらに数は限定されるが、日付の記載された個体もある。これらのことから、ひとまずは、この墨書きされた遺跡名を出土地と考えた。

また、墨書がないものの、杉山の図録中に遺跡名の記載のあるものもある。二次的な記録ではあるがこれを参考にして遺跡名を推定した。

全体の中には、僅かではあるが、一個体に複数の遺跡名が書かれたものがあり、一部に混乱がみられる。また、加藤は昭和2年に下郷共済会が刊行した『鍾秀館石器時代土器選集』と収蔵品の対比から、遺物の墨書きと土器選集での記載遺跡に齟齬のある資料が存在することを指摘している〔加藤 2012〕。したがって、量的には少ないものの、こうした資料がさらに存在する可能性は捨てきれない。この墨書がいつの時期のものであるのかは現段階で特定できていない。さらに日付入りのものは、土器自体に墨書されたものに限定されるが、セメントなどの補修部分に書かれたものは発掘からいくらかの時間を置いて書かれたものであることが確実であろうから、これらの中には伝聞的な記録も存在するかもしれない。

また墨書きの筆致の異なるものが存在する（写真2）。発掘者の高島の筆致との照合はまだ試みていないが、墨書きに複数の人間が関与したことは、ほぼ確実であろう。また土器の墨書と土偶の墨書の筆致が一致しているものがあり、同一人物が複数の遺物の注記に携わっていたことが推測できる。

高島は椎塚貝塚と福田貝塚の調査の内容を比較的詳細に報告している〔高島 1915a. b. c. d. 1916a. b〕この報告の中には日付を追って出土遺物の概要が記載されており、これらの中には個々の遺物を特徴づける記載もある。たとえば東京人類学雑誌「常陸国福田貝塚編」によると、1907年4月28日の記録にある「人頭土瓶の優品」は現在辰馬考古資料館蔵の顔面付き注口土器であろう。また7月27日の「鳥形土器」も同資料館所有の土器である可能性が高い。

これら以外にも日付毎に出土遺物の個数や形態的特徴などの概要が丹念に記載されているが、図や写真の提示がないため個々の同定には至っていない。また遺物の遺存状況に関しては、両遺跡ともに貝塚であることと関係してか、一定程度の割合で、土器の内外面に白色の付着物が観察できるものがある（写真3）。これは貝塚の貝層に包含されている遺物に往々にして認められるもので、貝のカルシウムが溶脱して付着したものと考えることができる。これらは酸によって容易に溶かすことができ

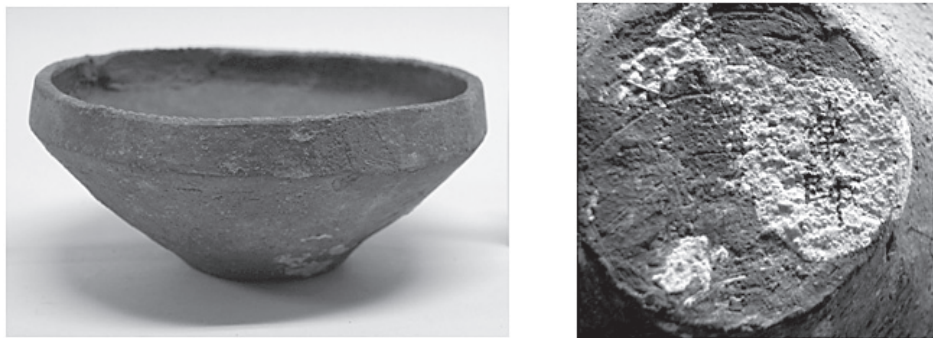


写真3 カルシウムの付着と墨書 (A123-11)

るが、土器表面に付着して固化した場合には、水洗いなどでも落ちない場合が多い。これらの知見を参考とするならば、白色物質の付着した遺物は貝層中より掘り出されたものである可能性が高い。コレクション中に同遺跡出土の豊富な骨角器が存在することもこの推測を裏づけるであろう。その多くは堀之内式から加曽利B式土器であり、安行式にはほとんど認められないので、高島の発掘した貝層の時期を反映しているとみて良いであろう。

3. コレクションの形成過程と遺跡研究

現代では出土地から遠く離れた大阪に収蔵されている資料ではあるが、これらの資料から遺跡に関する情報を取り出してみると、あくまでも復元個体からの判断ではあるが、椎塚貝塚と福田貝塚は、土器群の構成が、加曽利B式を主体としており、堀之内1式と同2式、さらに後期後葉の安行1式、2式を少数含むものから構成されている点で共通している。

高島の発掘が貝塚を主体としておこなわれているため、こうした时期的な偏りが指摘できるのだろう。この事実は、両遺跡における貝塚形成の大まかな時期を示唆すると判断できる。ただし、福田貝塚では晩期初頭の安行3a式の顔面付注口土器があり、また東京国立博物館蔵の資料中には前浦式期の土版などが含まれる。これらが貝塚地点であっても貝層上部の包含層から出土したものなのか、あるいは晩期の貝塚が存在したのかという点については判断できない。

一方、1971年に平安博物館によって調査された福田貝塚の薬師台地点〔渡辺1991〕では、表土下に存在した貝層の大半は攪乱されたもので、その下部に堀之内1式期の炉跡をとまなう遺構とその覆土が残されており、当時の発掘が貝層を主として行われたことを示唆している^(註1)。下郷コレクションの土器の型式構成とも調和的である。椎塚貝塚の土器についても同様の傾向が窺われ、堀之内式土器は全体の中で少ないが、筆者らが現地で踏査した際に貝塚部分の各所で認められた盗掘坑の断面には古い時期の攪乱が確認され、それらは貝層下部の遺物包含層をほとんど掘り込んではいなかった〔阿部ほか2010〕。こうした推測と現地踏査での所見からすると、福田貝塚や椎塚貝塚では貝層自体は大半が破壊されているものの、貝層下の遺構や包含層がまだ残存している可能性が高いであろう。

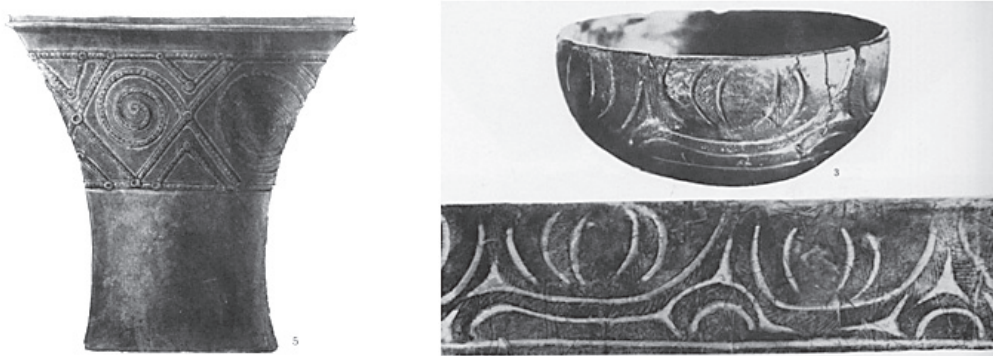
現稲敷市に所在する椎塚貝塚と福田貝塚は幸いにも遺跡のほぼ全域が山林や農地として残されている。明治期以後で本格的な発掘調査は椎塚貝塚では慶応大学による貝層の発掘、福田貝塚では平安博物館による薬師台地点の発掘が行われているが、貝塚部分に限定されており、その周囲に存在したであろう住居跡などの生活遺構の発見には至っていない^(註2)。そのため、両遺跡は明治期に盛んな発掘が行われ、多量の遺物が出土したことのみが今日に伝聞され、遺跡としての性格の十分な解明には至っていない。したがって、本コレクションと出土遺跡をつなぐ研究が両遺跡の性格解明のために果たす役割は大きい。

4. 考古コレクション研究と文化資源化

今回の検討は、全体の一部に限定されており、全貌の解明には今後の継続した作業が必要であるが、個々の資料の由来や遺物自体に記録された多様な情報を整理するなかで、以後の分析研究の展望と課題をまとめておきたい。

①コレクションの形成過程と歴史的意義

下郷コレクションにはいくつかの変容の過程が履歴として残されている。その第1の要因が高島の



第1図 下郷コレクションに掲載された資料〔杉山 1928〕

度重なる発掘と採集活動のたびにその数を増やしていることである。この点は幸いにも高島自身による発掘報告がなされており、明治期の考古コレクションの中では稀有な情報をもっている。

2つ目の要因として、所蔵者が3度にわたり変更されたことと、それに伴う収蔵先の分散である。遺物を実際に採集した高島多米治は1922年（大正11）には長浜の下郷伝平に遺物を譲渡している。ここでは13000点余におよぶ遺物が収蔵され、その代表的な土器の写真が『鍾秀館日本石器時代土器選集』として刊行されている。1924年の人類学雑誌N039－7～9には高木文による「採集家漫語（其2）」の中に高島のコレクションが下郷共済会に譲渡されたのを記念して開かれた展覧会の模様が報告され、その豊富な内容が垣間見られるが、「猶一言しておきたいのは土器の接合が拙であることを遺憾に思ふ」とあるように、数の多さの代わりに高島の復元には不足の部分があったらしい。そのため土器選集の刊行に際していくつかの土器に補修が加えられた可能性が高い。今日現存する資料の修復方法に幾種類かの違いが認められるのは、こうした事情を反映した可能性が高い。

下郷コレクションが戦前においてもっとも多く掲載されたものとして杉山寿栄男の『日本原始工芸』が掲げられる〔杉山 1928〕。その多くは写真と拓本や杉山のスケッチである点からみて、刊行に際して杉山自身による相当入念な資料調査が行われたものと思われる。

その後戦後の混乱期に鍾秀館は閉館され、やがてコレクションは大阪市立博物館、辰馬考古資料館などに分散してゆく。辰馬考古資料館には下郷共済会の専用木箱とともに優品が多く収蔵されているという〔加藤 2012〕。しかし、13000点余というコレクションの大多数は大阪市立博物館の改組を経て、現大阪歴史博物館において収蔵されていることは間違いない。とくに大阪市立博物館時代に、本コレクションは各地の縄文時代の展示会に展示されることが多く、またこれらの代表的な遺物が図録や解説書に引用されるなど、その存在が広く周知されるようになってゆく。

下郷コレクションという名称のもと、大阪歴史博物館において分散することなく収蔵されることによって、本コレクションの量的な変動はなくなった。ここにおいてようやく総点数13000余という明治期を代表する膨大な考古コレクションの内容が検討できる環境が形成されたのである。

②下郷コレクションの文化資源化と地域ネットワークの構築

本研究が今後の展開として意識しておくべき点は、コレクション形成過程の研究とともに、個別遺物の専門領域における研究を推進し、さらにこれを学術的な接点として遺物出土地（遺跡）の研究へと展開することにより、遺跡所在地をも包みこんだ下郷コレクションの活用場面を拡張する必要性である。

この点をより具体的に考えるならば、コレクションの大半が出土した貝層の残存部の発掘調査に

より、遺跡形成の過程の中にコレクションの本来の存在形態の、そのより具体的な状況を把握することができる。さらに動物遺存体の組成を明らかにすることによって、豊富な骨角製漁労具の在り方を生産活動の復元を通じて総合的に意義づけることが可能になる。

そして何よりも重要な点は、椎塚貝塚や福田貝塚がどのような集落構造を有する遺跡なのかといった今日的な問題点の解明である。単品的な出土品の活用ではなく、遺物群としてのまとまりから見える遺跡や地域の特性を明らかにすることによって、先史地域社会を実態視する

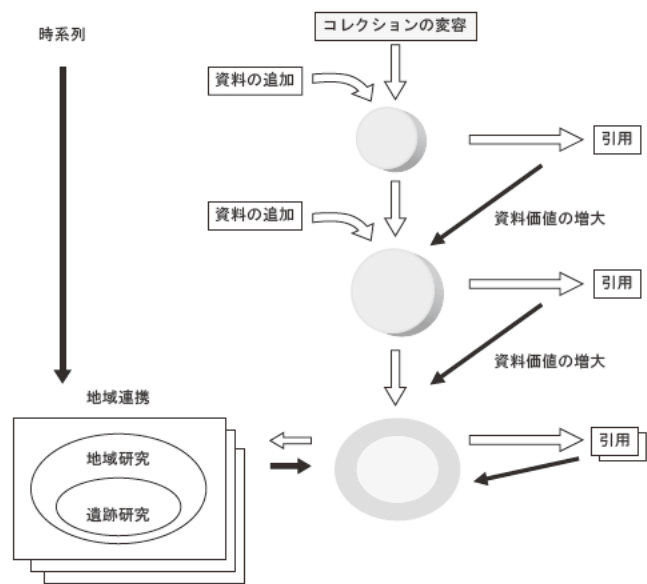
有効な資料としての意義がはじめて見えてくるであろう。本研究はその第1歩としての意味を担うものである。そして各場面におけるこうした研究によってもたらされた各種の活用履歴が、本コレクションの存在意義をより高めることになるであろう。

多くの考古コレクションがそうであるように、下郷コレクションにおいても出土遺跡や出土状況などの記録に不備がある点は明白である。また遺物の復元なども一定の水準を保つ整備された資料群とはいえない部分もある。しかしながら、これらの事実を現実的な資料管理面からのみ批判的に評価することは易しいものの、コレクションの活用の展望という点から見た場合、生産性に乏しい見解であろう。

むしろ資料群に潜在するこうした不均質性が、考古コレクションの形成過程を解明するための重要な糸口になる可能性が高いからである。さらに同時にこうした状況を生み出した要因には、黎明期の考古学がもつ古物収集的な特質が反映していると見るべき点がある。膨大な資料の中で、とくに特定の形態や素材の遺物に高島の興味があつたことは事実であり、異形土器や土偶、骨角器や貝輪などの特定遺物については、未製品や微細な破片資料にいたるまでが収集されているからである。

コレクションを取り巻く社会背景が大きく異なる今日において、こうした資料に見える価値観の違いやコレクションの在り方には日本考古学が歩んだ長い道のりが反映されているものであり、学術面だけに限定されない考古コレクションのもつ特異で重要な情報が内在している。そして、その時々での扱いの違いや資料の変容の過程を示す関係図録や文献類が豊富である点も本コレクションの特徴として特筆に値するであろう。

さらに、黎明期の考古コレクションのもつ特性の1つとして、資料が出土地から遠くはなれた場所に所在する点が多い事実を指摘することができる。下郷コレクションの大半を占める茨城県椎塚貝塚、福田貝塚、千葉県余山貝塚などは、とくに戦前において多くの古物収集がおこなわれたことで著名な遺跡である。ところがそうした遺跡のある地域にその遺跡の重要性を今日に伝える資料が殆ど存在しない。遺跡の保存と活用を考える場合に、こうした現実的な問題を解決する方策の1つとしてもコレクションの研究成果の地域還元は遺跡の保護と活用という観点からも喫緊の重要問題であろう。



第2図 コレクションの変容と資源価値の増大

【註】

(1) 明治期の発掘の一例として、江見らの発掘は、「深く深く貝層を掘り下げて、地のシキに達するを待ち、今度は上部に向かって横押しに掘り進むという順序を立てた」〔江見1908；pp. 42〕とあるように、貝塚の場合は貝層が発掘の主な対象とされて、貝層下の遺構や包含層はほとんど掘り下げられることはなかったようである。

(2) 平安博物館による福田貝塚薬師台地点の発掘では、貝層下に堀之内1式期の炉址が発見されており、住居跡の一部分の可能性はある。炉址はローム層上の褐色土層中に設けられており、竪穴住居とは構造が異なるかもしれない。

【引用・参考文献】

- 阿部 芳郎 他 2011 「考古コレクション形成過程に関する基礎的研究」『駿台史学』第142号, 駿台史学会
- 茨城県史編纂委員会 1978 『茨城県史』考古資料編 先土器・縄文時代, 茨城県
- 茨城県史編纂委員会 1979 「福田貝塚」『茨城県史』考古資料編 先土器・縄文時代, 茨城県
- 江見 水蔭 1908 『地底探検記』, 博文館
- 加藤 俊吾 2012 「近代における縄文時代コレクションの形成とその活用 ―高島多米治採集資料を題材として―」『土偶と縄文社会』先史文化研究の新視点Ⅲ, 明治大学日本先史文化研究所 (2012年3月刊行予定)
- 下郷共済会 1926 『鐘秀館蔵日本石器時代土器選集』, 下郷共済会
- 杉山 寿栄男 1928 『日本原始工芸』(北海道出版企画センターにより1976年に再刊)
- 杉山 博久 1999 『魔道に魅入られた男たち』, 雄山閣
- 高島 多米治 1915a 「常陸国福田貝塚編 (一)」『人類学雑誌』第30巻 第8号, 東京人類学会
- 高島 多米治 1915b 「常陸国福田貝塚編 (二)」『人類学雑誌』第30巻 第9号, 東京人類学会
- 高島 多米治 1915c 「常陸国福田貝塚編 (三)」『人類学雑誌』第30巻 第10号, 東京人類学会
- 高島 多米治 1915d 「常陸国福田貝塚編 (四)」『人類学雑誌』第31巻 第3号, 東京人類学会
- 高島 多米治 1916a 「椎塚介墟篇 (一)」『人類学雑誌』第31巻 第4号, 東京人類学会
- 高島 多米治 1916b 「椎塚介墟篇 (二)」『人類学雑誌』第31巻 第5号, 東京人類学会
- 渡辺 誠 編 1991 『茨城県福田 (神明前) 貝塚』, 財団法人古代学協会

